

美歴だより

諫早市美術・歴史館だより

CONTENTS

館長のつぶやき	2
BIREKI・レポート	3
いさはやの民謡	4
いさはやの歴史	5
美術の部屋	6
美歴 ねこあるき	7
お知らせ	8

Isahaya
Museum of
Art & History
Museum News
Vol.10



このたび、県指定の有形文化財となり、大変喜んでおります。



(いたずら小僧的な)制吒迦童子
せいたかどうじ

我、多良岳金泉寺の不動明王なり。
平安時代に造られ、この地にて崇め奉られております。



不動明王
ふどうみょうおう

現在は、美術・歴史館にて、皆様と相まみえる機会を楽しみにしております。



(従順な)矜羯羅童子
こんがらどうじ

館長のつづやき

基準ってなんだろう

▼今更考えるまでもなく、自然の成り行きでとか暗黙の了解で決まっているものが結構ある。あるいは、決断を迫られた時、深く考えずに、「エイ」と決めてしまい、そして後悔が！

でも考え直してみると、無意識にとはいえ何か判断基準が内在していた。損得勘定だ。その損得とは要は生きるか死ぬかの自己防衛判断、欲求達成志向であったかも知れない。

▼稀に「ひらめき」を感じる。神の啓示などとは言わないが、夢に見たとか、背中を押されたとか。しかしそのひらめきが意外に大きな影響をもたらしたという経験を持つ方がいる。ひらめきとは、動物的反射神経のなせる業かも。

▼さて、日常的に諸事実践している我々にとってその時々判断基準は暗黙のうちに序列をつけている。経済学でいうところの「効用」だ。

▼ところで周囲を見回すと何にでも名前と記号が付されている。数字の1、2、3や、ローマ字のA、B、Cなどは、それ自体記号であり意味を持たない。ところが人名とか地域名あるいは商品名、動物の名前、建物などになると、最初にどれを書こうか、次はどれにしようかなど、意外なほどに苦労する。そして「名称」を活用する段になると、バラバラでは不便だと気が付く。誰が考え付いたのか、いろいろの物や事を分類するという知恵・技術が生まれた。大きい小さい、高い低い、遠い近い、あるいはアイウエオ順、北から順など、様々な順序が考えられた。

▼ところが順序に意味が生ずると大きな価値を持つ。すなわち順序が価値観に結び付き、相対評価＝良い・悪い、上位・下位などの序列に

なってしまう。一方で、順序自体に何ら意味を持たない場合、例えば、ある街の商店の一覧は名前が並べているだけでその順番自体、あまり大きな意味を持たない。小中学校は、学校一覧に掲示されるが、記載順序には何ら意味を持たない。しかし、市議会議員選挙の広報は届け出順で紹介するが、当選後の議員の議席は、議会規則では議長決定とあるが、慣例により当選回数の少ない順に議席番号は決められているという。評価とは違う一種の序列が顕現する。評価には基準が必要だ。

▼基準と言えば、「定員」も気になる。小中学校の1学級が40人だった根拠は？乗合バスや電車の定員は？近年、エンゲル係数の理解が変わってきたというが、食生活の何かが変化したのだろうが、その基準は？等々考えると、基準も曖昧さが人間業なのかもしれない。そこにゆとりが生まれている。

▼作成資料の保存、廃棄なども規則等で基準は決められているが、そもそもその基準は誰にとって本当に有効なのだろう。その判断で継承・伝承など記録保存の重要度が試される。

＜保存は簡単、破棄は困難＞
を反芻しなければ。それにしてもゴミ屋敷にならない工夫も必要か。基準って難しい。



(写真は、現代の三猿=よく見、よく聞き、よく話そう)

(館長・鈴木勇次)

BIREKI・レポート



VOL.1 諫早眼鏡橋は〇〇なんです！



2月25日から開催した企画展「絵図・地図・空中写真展—江戸から昭和の諫早を俯瞰する—」は、3月27日に好評のうちに終了することができました。鮮やかな色彩のまま保存されたまるで美術品のような絵図の数々や、昭和の諫早を切り取った空中写真などお楽しみ頂けたことと思います。また、会期中、展示をより深く楽しんでもらうための関連イベントをいくつか企画しました。長崎大学名誉教授 岡林隆敏先生による講演会に始まり、学芸員によるギャラリートーク、今回の展示のために作ったリーフレット（絵図）を持って江戸時代の痕跡を探す「絵図を持って散策」を実施しました。講演会では、「諫早眼鏡橋は現存する階段式の二連アーチ橋では日本一の長さを誇り、かつ、日本で最も美しい石橋である」というお話があり、大いに盛り上がりました。



▲講演会「石橋の歴史から見る諫早眼鏡橋—日本を代表する美しい石橋—」(2/25)



▲「絵図を持って散策」(天満町方面)



▲毎週土曜日に実施した「ギャラリートーク」

いさはやの民謡

VOL.1 作業歌

♪ 田植歌 ♪

ア— わしとお前さんと アラ 植えた田の黒田よ—
いつか穂が出てよ アラ ままとなる
ア— 腰の痛さよ アラ せまち田の長さよ—
四月五月の アラ 日の長さ



民謡には仕事歌や祝い歌、座興の歌、数え歌などいくつもの種類があります。田植え歌は作業歌、田植えの時の歌で、歌詞にはその頃の出来事などを即興でつけることが多く、数人で行う田植えでは掛け合いで歌っていたものです。そのため終わりが決

まっているわけではなく、何番も続きました。その土地、その時の歌です。この歌は七七七五で構成する形式に入るもので、広い地域で歌っていたものです。

♪ 新地節(しんちぶし) ♪

ア—ア 金比羅岳から 小野島見れば アラヨ— なぐれお春やんが 濡いなう
「来たろば寄いなさい 道端じゃっけん ダゴして待ちよる
三角ダゴならいつでも待ちよる」
ア—ア 濡どんばいなうよい わが身どん飾れ アラヨ— わが身飾れば 銭もらう
「田舎の姉さん 汚れはだてかん
汚れちゃおっても 髪さしゃ銀だよ」

諫早では鎌倉時代から続く干拓の歴史があります。その中心であったのが小野地区です。ここは「新地節(濡いない歌)」で有名ですが、これもまた作業歌です。

「新地節」はもとは熊本県八代市鏡町あたりで歌われていた「大鞆節」で、それが天草に伝わり「濡切り節」として親しま

れ、さらに小野地区に伝わったものです。「濡切り節」では「お菊さん」が登場しますが「新地節」では「お春さん」になっています。

高城の史跡 Vol.1

①鳥居

高城頂上への石段を登り切ったところに鳥居があります。額塚に「高城社」左柱裏に「天保十四癸卯」(1843)、右柱裏に「九月吉日建之」と刻まれています。

②がめんとさん

忠魂碑後方に「がめんとさん」と呼ぶ塔が2基あります。右側の塔は正徳5年(1715)、諫早家第7代領主茂晴公が建立、正面に「読誦大乘妙典壹萬部之塔、左側の塔は寛保元年(1741)、諫早家第8代領主茂行公が建立、正面に「読誦法華経一萬部塔」と彫られています。どちらもお経を一万回唱えた記念として建立されたものです。ちなみに、一万回唱えるまでに右の塔は3年、左の塔は10年かかっています。また、このように亀の上に塔が乗せてあるものを亀踏(きふ)と呼びます。

③藤原明神・高城明神

高城頂上に2基の立派な石祠があります。向って左側が「藤原明神」、右側が「高城明神」です。藤原明神は諫早家の遠祖、高城明神は諫早家初代龍造寺家晴公を祀ったものです。

下の絵葉書を見ると元々①の鳥居は大クスの脇に建立されていたことがわかります。また、人物の後ろには②の読誦塔、③の藤原明神・高城明神があることから、現在の場所とは違う場所に建立されていたことがわかります。いつ移設されたかについては資料が無いので不明です。



Vol.1

美術の部屋

もくぞうふどうさんぞんぞう

金泉寺の木造不動三尊像が 県指定有形文化財に指定されました

せいたかどうじぞう こんがらどうじぞう

多良岳にある金泉寺（高野山真言宗）の本尊は、不動明王と制陀迦童子像、矜羯羅童子像からなり、寺伝では空海の作となっています。

不動明王と制陀迦童子像は、一木造（※1）で造像法や彫刻表現から2軀ともに平安時代後期12世紀の造像と考えられます。

矜羯羅童子像は寄木造り（※2）であることなどから、中世に造像されたものと判断できます。12世紀に造られた当初の像が失われたため新たに補ったものと考えられ、不動三尊像への信仰が途切れることなく続いていたことを示しています。

不動明王や制陀迦童子像にみられる簡明な彫刻表現は、仏像でありながら神像に通じる特徴も備えています。また、荒々しくノミ跡を残すのは「鈍彫り」と呼ばれる技法で、東日本を中心に多く確認される鈍彫像としては日本の最も西に位置する作例として貴重です。

※本資料は美術・歴史館に寄託されています。

（※1）一木造：像の頭部や体部などの主要部分を一本の材で彫りだす方法。

（※2）寄木造：同等の大きさを持った二材以上の用材を規則的につなぎあわせて像をつくる技法。11世紀後半の京都で確立され、以後、造像技法の主流となった。



不動明王



制陀迦童子像



矜羯羅童子像



鈍彫り



美歴 ねこあるき

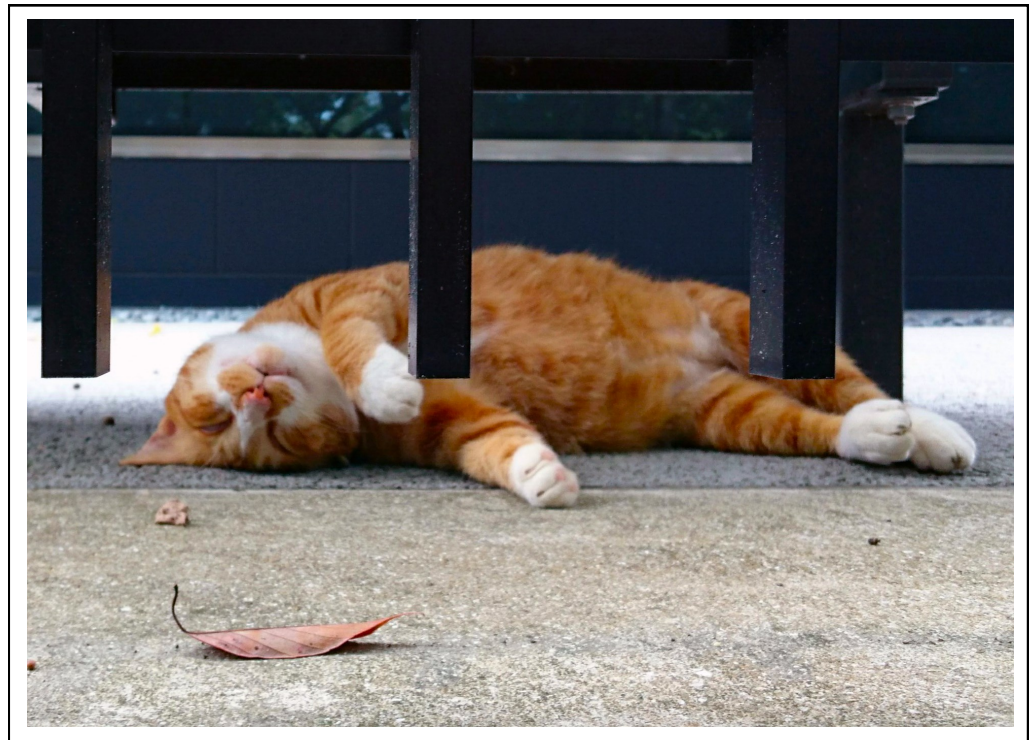


春の陽気に

とある、昼下がり
思わず二度見
どれだけ気持ちいいのだろう・・・

『あいたたたっ、寝違えたばいっ』

あとから、そんな声が聞こえたような気がした。



DATA

- 場 所／美術・歴史館北側(ベンチ下)
- モデル／氏名不詳(館周辺に出没) ～幸運を招くといわれる尾曲がり猫～
- 撮 影／スマートフォン

お知らせ

発行日：平成29年4月

館企画展

新収蔵品展



当館は平成26年3月1日の開館から3年が経過しました。開館以来多くの方から、美術、歴史、民俗など様々な分野の貴重な資料を寄頂いています。今回はそうした資料を前期・後期に分けて一堂に展示します。

期間

前期：4月19日（水）～5月8日（月）

後期：5月11日（木）～5月22日（月）

午前10時～午後7時※最終入場18:30

※毎週火曜は休館

会場

美術・歴史館[2階企画展示室・研修室]

観覧料

無料

プレゼンテーションウォール開放



常設展示室「諫早の美のコーナー」のプレゼンテーションウォールを下記の期間中に開放し、新緑美しい高城回廊や御書院の庭園を借景とした展示を行います。

期間

4月12日（水）～5月29日（月）

展示資料

現川焼などの館所蔵陶磁器

観覧料

高校生・大学生・一般 200円

小学生・中学生 100円

※市内在住または市内在学の小・中学生は無料

※団体(15人以上)割引あり

編集後記

3年1ヶ月・・・

美術の“ビ”の字も、歴史の“レ”の字も知らなかった私が何故か美術・歴史館で勤務することになり、博物館のなんたるかも知らないまま、ただただ目の前の仕事に追われてきた日々・・・

ふと気づけば、アラフィフ、白髪や皺も増え、手には老人性シミまで現れ、今では自分自身の“ビ”と“レ”だけは否が応でも思い知らされています・・・

さて、今月の表紙、「金泉寺の木造不動三尊像」。平安時代後期に造られ寺伝では空海作だとか。

簡明な彫刻表現に、途切れることなく続いてきた信仰の歴史。

これこそまさに“美”と“歴”と呼ぶに値するものではないでしょうか。

この三尊像は本年2月、当館の開館3周年を祝うかのように県指定文化財となりました。

現在、当館の常設展示室内にて展示されており、ナント、200円で観覧することができます。

そつと耳をすませば、古のつぶやきが聞こえてくるかもしれません。

お時間が許せばぜひ一度、本物の「美」と「歴」を、ご覧ください。

(山本真)